

平成24年8月3日発行

北海道国際理解教育研究協議会

会長 中村 淳
事務局長 古里 和雄

会報 第82号



未来を創造する力を育てる

北海道国際理解教育研究協議会
会長 中村 淳
(札幌市立大倉山小学校 校長)

昨年度に引き続き会長を務めさせていただくことになりました。本会は、30年以上にわたり、全道17地区・400名の仲間とともに未来を切り拓く児童生徒の育成を目標に実践を積み重ねております。この実践を充実発展のために微力ではありますが、全力で取り組む所存であります。会員の皆様のご理解とご協力をお願いいたします。また、一人でも多くの方が、本会の仲間として国際理解教育の実践されることを願っています。

さて、昨年12月に、東日本大震災や高齢化社会などこれからの社会に対応した人材の育成を目指した、「第2期教育振興基本計画の策定にむけた基本的な考え方」が公表されました。その中で、持続可能な社会の一員として多様な人々と未来の社会のために、今、存在する問題を一つ一つ解決していくことができる人間を育てていくことがこれからの教育課題として提起されました。このような状況において、教育現場においては、あらためて21世紀を生きる人間としての資質・能力を整理し、授業の姿として提案する責務があると考えます。

本会においては、変化の多い時代の教育のもつ重要性を鑑み、21世紀に生きる子どもたちの人間形成の在り方を研究してまいりました。未来社会を見通し、子どもたちが、自分たちの暮らす地域を見つめることで、よりよい未来を創造するためにはどうしたらよいのかを考え、行動する力を育むことを目指して研究を進めたいと考えています。

特に、本年度は、第10次研究の2年目にあたりますとともに、昭和55年本会の第1回全道研究大会開催の地であります帯広市において10月25日(木)26日(金)に第33回北海道国際理解教育研究大会十勝・帯広大会を開催することとなっています。皆様とともに、国際理解教育の実践の確かさを実感するとともに、グローバル時代における国際理解教育の新たな展開の方向性を共に創造していきたいと願っています。十勝・帯広大会に参集いただき、国際理解教育の推進と充実のための話し合いを深めていただくことを重ねてお願いいたします。

平成24年度活動方針

北海道国際理解教育研究協議会

1. 基本方針

21世紀を生きる北海道の子どもたちに、国際社会に貢献できる日本人としての資質を育成する国際理解教育の在り方を探る。

- ・学校教育における国際理解教育の在り方を、主に授業を通して深める。
- ・新しい教育改革の流れの中で、国際理解教育の果たすべき役割を探る。
- ・各地区との交流を深め研究交流を推進し、その成果を各地区の国際理解教育に生かす。

2. 事業内容（教育研究団体として北海道の教育に貢献する）

- (1) 全道大会を開催し、研究成果を交流する。
- (2) 研究成果の交流のため、「研究集録」や「研究紀要」を発行する。
- (3) 「会報」を発行し、研究の成果や情報を交流する。
- (4) 地区との連携を密にし、組織を強化し、研究内容を深化すると共に各地区の研究推進に協力する。
- (5) 派遣教員と帰国教員に対し、研修会を開催し、それぞれ支援する。
- (6) 国際理解教育に必要な各種資料を収集し、インターネットでの情報提供や交流を行う。

3. 24年度の重点

- (1) 第33回北海道国際理解教育研究大会 十勝大会の成功を図る。
 - ・教育研究団体として会員の資質向上と研究の深化を図る。
 - ・北海道の国際理解教育の向上に努める。
- (2) 研究の中核として「地区」「北海道」そして「全国」へとつながっていく組織づくり
- (3) 各地区に密着した各地区の研究の深化と交流を図る。
 - ・研究主題を共通の窓口としながら、各地区の主体性を発揮した研究を推進する。
 - ・各地区や時代の要請を生かした研究を進め、会員の意識の向上を図る。
 - ・帰国教員の貴重な体験を各地区の教育に生かす。
- (4) 「行動する力」をはぐくむ国際理解教育の在り方を探る。
 - ・自分ごととして取り組む子どもの姿を発信する研究。
 - ・小学校外国語活動の在り方を各地区で研究や研修をもとに実践を積み、研究大会などで交流を深め、よりよい外国語活動の進め方を探る。

平成24年度・研究推進について

研究部

1. 基本方針

児童・生徒が「自分の生き方」に誇りをもち、自分の未来と地球の未来に対して責任を担うことができる生き方を創造する場としての国際理解教育の在り方を明らかにしていく。

2. 24年度の研究【 第10次研究の2年目 】

今後も引き続き、「行動力」を支える豊かな心をはぐくむことも大切にしていきたい。とくに、「つながり」や「関係性」をキーワードに、他者に関心をもち、他者との違いを認め、他者のよさを感じ、自分の中に取り入れることができるような共によりよく生きていこうとする姿勢をもつ子どもの育成を目指したい。そのためには、「新たな（多元的な）視点を取り込み、共感的に他者を理解する力」「地球的な視点で物事をとらえ、判断する力（柔軟な思考力）」が重要であると捉え、実践を支える「（主体的）行動力」の育成を引き続き研究の中心に据え、「めざす子どもの姿」「めざす授業の姿」をより進化（深化）させていきたいと考える。

道の研究の趣旨が各地区に浸透するように、研究部としても努力をしていきたい。

【 第10次研究主題 】

自分と地球をつなぎ、未来を切り拓く児童生徒の育成

めざす子どもの姿

地球的な視野をもち、よりよい未来のために

仲間とのつながりを大切に主体的に行動する姿

「異文化理解」から「多文化共生」へと児童生徒の意識を高めていくことが大切である。

そのためには、国際社会すなわち多様な他者の中で対話を通して人との関係（つながり）をつくり出す力をはぐくむ必要がある。そこで、人（他者）との関係をつくり出し、積極的に行動していかうとする、

- ① 他者に関心をもち、他者との違いを認め、他者のよさを感じ、自分の中に取り入れることができるような豊かな心をもつ子ども
- ② 共によりよく生きていこうとする姿勢をもつ子ども

の育成を目指す。

また、国際社会において、他者（他国）とのかかわり（つながり）を意識しながら行動するための素地として、

- ・ 新たな（多元的な）視点を取り込み、共感的に他者を理解する力
- ・ 地球的な視点で物事をとらえ、判断する力（柔軟な思考力）

が重要であると捉え、実践を支える「（主体的）行動力」の育成を研究の視点に据える。

めざす授業の姿

仲間と共に，問題を解決し地球の未来のために

新たな価値を創造する姿を求めて

「行動力」は、社会性の発達にともなって育っていく。子どものかかわる対象が、自分に身近な他者から、少しずつ広がっていくからである。国際理解教育部が今まで一貫して主張してきた「身近なところから問題を見つけそしてその問題解決に向けて行動することが大切」という考え方にもつながると考える。

つまり、自分たちの生活している地域や社会を見つめ直し、社会や人とのかかわりを意識する（実感する）ことが大切であると考え。加えて、地域の魅力を探究し、その魅力を発信することで改めて地域の人・自然・歴史・文化を意識することへとつながる。このことは、地域の自然・伝統と文化（人の営みの含めて）についての理解（考え）を深めることになる。そして、他国の人々が自国の伝統と文化に愛着や誇りをもって生きていることを理解し、これを尊重する態度（姿勢）をはぐくむことにつながる。言い換えると、国際理解の素地を養うことになるのである。

そのためには、授業（単元）が学校の教育課程に明確に位置づいていることが重要である。小学校の教育課程の中で一貫して子どもたちが学んでいけることが、国際理解教育を単に知識理解にとどめることなく、教科・道徳・総合的な学習の時間などあらゆる学校教育の場で体験的な学びを生かし、問題解決的な学習を展開することを実現できるからである。

また、そのことにより、子どもたち一人一人に、

- ・ 地球的な視野に立ち、共通の目的をもって協働し、問題を解決していこうとする態度を育てる。
- ・ 異なった文化をもつ人々と積極的にかかわろうとする意欲を高める。
- ・ 相手の立場を尊重し、互いの違いやよさを認め合おうとする態度を育てる。
- ・ 自国の文化理解に根ざした自己の確立を図る。

ことを可能にするのである。

さらに、国際理解教育が教室の中だけにとどまっているのではなく、自らの生き方に反映され、社会へと開いていく必要がある。授業（単元）だけではなく、日々の生活における様々なかかわりを意識させることが、意識をさらに高めることにつながると考える。学校生活全体、家庭や地域、社会という教室から開かれた「空間」「時間」が具体的な行動の場であって、実践する力が発揮される場なのである。授業（単元）を通して高まった意識を行動にあらわすことによって、対象とのかかわりやコミュニケーションが生まれる。この連続が視野を広げ、判断する力（柔軟な思考力）をはぐくむことになるのである。

◎研究の視点

視 点 1

子どもと地球をつなぐ教材づくり

子どもに、地球的な規模を投げかけても、グローバルな視点から問題解決にあたることは難しい。学びの中で、繰り返し地域と地球とのかかわりを実感させ、「地球」への思いをめぐらせる中で行動化につなげていかなければならない。

この体験を通して、子どもは、自分中心の見方から、違いを違いとして受容する多様性や、地球では全ての人（もの）が互いに依存しながら生きているという地球的な視野に立った考え方や態度をはぐく

み、共に地球の未来について行動していくことを学んでいくのである。

教材化を図るときには、「E S D」の理念を理解し、教材化を進めていきたい。

視 点 2

地球的な視野をもち、共に問題解決していく 学習活動の構築

地球的な視野をもつ子どもをはぐくむためには、仲間と共に、多様な考えを受容しながら、共感的に解決することが求められる。

そのため、問題解決の場面においては、自分の考えに固執することなく、意見が対立する場面においては、共に新しい視点をつくり出し、共通の目的のために自分の力を発揮することが求められる。そのため、授業では、他者（教室の仲間だけでなく地域の人々そして、地球の人々）とかかわりあう場면을積極的につくり出すとともに、子どもが他者と対話しながら、行動に向けてあらたなかかわりを創り出していく学習活動を構築したい。

◎小学校外国語活動について

今年度より小学5・6年生に年間35時間の外国語活動が完全実施されている。本会においては第7次研究の時から取り組み、国際理解教育の手立てとして有効であることが確かめられている。また、そのためには、外国語を異文化ととらえ、「担任の教師が教える」「音声を大切する」など基本的な取組の重要性も確認された。

新学習指導要領実施に伴って「小学校外国語活動」がすべての学校で取り込まれることになる。その中で、カリキュラムをどう組んでいくかという課題はもちろんあるが、「小学校外国語活動」を通して地球的な視野をもつ子どもをどのように育てていくか、ビジョンをもって取り組まなければならないと考える。すでに、「めざす子ども像」や「授業像」をしっかりと定めてカリキュラムを編成している地区もあるが、「国際理解教育」としての「小学校外国語活動」をどのように位置づけて取り組むのか、実践を通して確認していく必要がある。

そこで、第10次研究では、小学校外国語活動の実践交流を通して「地球的な視野をもつ子どもを育成するために国際理解教育としての小学校外国語活動のあり方」について検証していきたい。

3. 課題別分科会について

①分科会構成

3分科会構成

〈テーマ〉

- 第1分科会 地域からの発信、仲間と共に行動する姿を求める国際理解教育の実践
総合的な学習の時間での取組を中心に、地球的な視野に立って、生きる力をはぐくむ学習の実践を交流します。「子どもの行動する姿」を求める実践の発表、さらに持続可能な開発のための教育（E S D）の推進をめざした国際理解教育の計画と実践を考えています。
- 第2分科会 国際交流や国際協力を通じた国際理解教育の実践
地域の外国人との交流を単元に位置づけた授業実践、JICAなどNGOと連携した国際理解教育の実践を交流します。
- 第3分科会 外国語活動を通じたコミュニケーション能力をはぐくむ国際理解教育の実践
新学習指導要領の完全実施にともない、「小学校外国語活動」「中学校・高等学校英語」などの取組の成果をもとに授業実践を交流します。